

Ⅱ. 総合人間科高校の実践報告

高1	石杉藤	川本田	久雅高	美子・弘	福滝・加	谷口・藤	敏子
高2	仲佐	田藤	高恵俊	子樹	斎飯	藤島	子久
高3	西山	川田	陽	孝徹	米徳	田井	一雄
	三丹	島下	容	子	柳鈴	木	久悠
						恵容真幸	子久一
						閨輝嘉一	雄久悠

1. 高校1年生

「生命と環境」

—1997年度と1998年度の比較検討も含めて—

石杉藤	川本田	久雅高	美子・弘	福滝・加	谷口・藤	恵容	敏子
-----	-----	-----	------	------	------	----	----

I. 学年テーマについて

「生命と環境」は社会の根幹にかかわる問題であり、避けては通れない問題である。しかし、既成の教科ではなかなか継続的に扱うことが難しいのが現状である。「生命を大切に」、「環境を考えよう」というような言葉をテレビや新聞、パンフレットなどでよく見かける。しかし、「生命」も「環境」もあまりに大きな定義をもつ言葉であるために、自分自身の生活に引きつけて考えることができない場合も多い。

高校1年生の総合人間科では、これらの点に考慮して、生徒一人一人が自分と「生命と環境」との接点を見つけ、一年をかけて問題追求を行った。さらにその過程で、メディアからの情報だけでなく教室から出て、自分たちで見聞きする機会をもち、自分の意見を発表したり友人と意見交換する場を多く設け、自分たちに何ができ、何をすべきなのかを考えていくことを目標としている。

1997年度は、各自が学外に出て、フィールドワークを行い、友人と話し合いする中で、学校を人とのつながりの場とし、これを拠点として社会の中での自己を問い直し、幅広いネットワークを形成していくことを願って、「考えよう！私たちのネットワーク」というサブタイトルをつけた。

総合人間科を始めてから3年目であったため、すでに研究集録やフィールドワーク先一覧などがあり、2年生、3年生もフィールドワークの経験があるため、個人テーマを考えるために、先輩に尋ねるなど校内のネットワークも広がった。

1998年度は、122人がそれぞれの方法で、この大きな問題である「生命と環境」にせまって欲しいと願って「122通りのアプローチ」というサブタイトルをつけた。「生命と環境」というテーマから考えるのではなく、普段から疑問に思っていたことや興味・感心のあることを追求していく過程で「生命と環境」に迫っていくことに重点をおいた。自分で考えた疑問点を追求していく中でともすると忘れがちな“知る喜び”を味わい“自分で考えることの大切さ”を感じ「人生を自覚的に選択していく力」を育てる基盤となることを願っている。

Ⅱ. 一年間の活動内容

(4月18日)オリエンテーション(授業参観)

今年度の活動計画、昨年度の内容紹介
林間学校クラス討論会準備

(5月27日～29日)

林間学校
分科会とクラス討論会

- (5月30日)林間学校事後指導、作文
個人テーマを考えるためのガイダンス
- (6月6日)個人テーマを20人グループ内で発表し、アドバイスしあう
- (6月20日)個人テーマの追求方法の計画書作成、夏休みのフィールドワーク計画書作成 1回目
- (7月4日)個人テーマの追求方法の計画書作成、夏休みのフィールドワーク計画書作成 2回目
- (夏休み)各自資料探しとフィールドワーク
- (9月5日)グループ別 夏休みの活動報告会
活動報告書、読書記録提出
- (9月19日)自分のテーマについて調べた内容を中間報告としてプリントに書いて提出
- (10月3日)フィールドワーク先探しと交渉
- (10月31日)教育学部 的場正美先生のお話
「聞き取り調査(インタビュー)について」
- (11月7日)フィールドワークでの訪問先へ質問書と学校からの訪問依頼書を発送
- (11月12日)高校1年生フィールドワーク
- (11月19日)お礼状の発送、フィールドワーク報告会の準備
- (11月21日)20人のグループごとにフィールドワーク報告会
- (12月5日)個人論文作成 1回目
- (1月30日)個人論文作成 2回目
- (2月6日)研究集録原稿作成
- (2月20日)小論文「総合人間科を通して考えたこと」作成
個人論文を交換して読み、一言ずつコメントを書く

Ⅲ. 生徒の取り組みの様子

(1) 林間学校

1997年度の林間学校では研究企画が4つあり、クラス別フィールドワーク、現地の方に小グループでお話を聞く分科会、クラス別討論会(ディベート)、教員ガイダンスと盛りだくさんで企画担当の生徒が多忙であった。そこで、1998年度は研究企画を2つに減らし、クラス別討論会(パネルディスカッション)と分科会のみにした。

クラス別討論会では、A組「大人と子どもどちらが得か」、B組「朝食のスタイル」、C組「男に生まれたり女に生まれたりか」というテーマで話し合ったが、各クラス6班の中で一人ずつパネリストを決めただけで、あまり準備をしていかなかったこともあり、資料やデータという点では、事前学習をしっかりしていった昨年度に比べて劣ったが、だれで

も意見を言いやすいテーマであったためにその場でパネリスト以外からの発言も多かった。昨年度はディベートで自分の意見が言えないという不満があったためパネルでディスカッションにしたのであるが、発言者の考え方がわかるという点では、高校から入学してくる1クラス分の生徒との融和をはかる意味ではディベートより適切であった。

分科会も4つの分科会に絞り、「花祭り」と切り絵、「水源地見学」、「植物」、「地域の農業」のみとした。昨年度の方が、9グループ13人が生徒の泊まる和室に座り込んで聞いたため、まとまりやすく印象も強かったが、4つにすることで企画・運営は楽になった。しかし、1つのグループが約30人となり、生徒の中には眠っている者もいた。それでも、マイクロバスに乗って水源地を訪れ、森林組合の方に来ていただいて説明をしてもらった「水源地見学」のグループは、戻ってから水の飲み比べも行い退屈しない2時間となった。茶臼山の水と用意した2種類のミネラルウォーターとは区別がつかない生徒が多かったが、学校で汲んでいった水道の水はほとんどの生徒が言い当てることができ、順位として“最もまずい”ということになった。

教師のガイダンスもやめたため、時間にゆとりができ、自由時間が増え、友達づくりのよい機会となった。しかし、一方で、ここから始まる総合人間科のガイダンス的な要素が減ったため、後で、個人テーマが昨年度と同じ時期に決めることができない生徒が昨年度より多かった。

昨年度は中学3年生の担任2人が高校1年生にもちあがったため、3分の2の生徒の顔を知っていた。このため、係の生徒にクラス討論の準備や司会、記録用紙の配布・回収などを任せることができたので、内容が多くともスムーズに進行した。しかし、今年度は担任3人も自分のクラスの生徒の顔を覚えた程度の時期であったため、内容は少なくとも、教員が直接手を出さなければならない場合も多かった。

(2) フィールドワーク

①グループ分け

11月12日のフィールドワークでは昨年までと同様に、生徒全員が自分の個人テーマにあった訪問場所を自分で見つけ、自分で交渉した。基本的には午前、午後それぞれ一カ所ずつである。

昨年度は個人テーマ別に6つのグループに分け、それぞれに指導教官として担任と副担任がついた。その結果、「科学に関するグループ」や「環境に関する

るグループ」などは、落ちついて活動ができたが、「その他」に当てはまるグループで、課題に取り組まないばかりではなく、総合人間科の時間に出席しない、他の生徒のじゃまをするなどの問題行動をする生徒が数人集まってしまった。そこで、今年度は、各クラスの中で内容の似たグループに2つに分け、正担任と副担任で受け持った。この結果、総合人間科に対して意欲の低い生徒がかたよることもなく、朝と帰りのS、Tなどで自分の指導生への連絡ができ、指導しやすかった。

②フィールドワーク先探し

昨年度の生徒は、中学2年生のときに、個人研究を行い、自分でフィールドワーク先を見つけて交渉した経験があったため、スムーズに進んだが、今年度は今までグループでしかフィールドワークに行っていなかったため、一部の生徒は交渉に難航した。1つの交渉先で断られたならば、次々と交渉してみればよいと思うのであるが、20分ぐらい電話の前に座り込んでいるのである。「早く次の電話をかけたら？」と言うと「もう少し元気になってからかけます」と言うのである。「断られる」ということは、私たち教員が考える以上につらいことであったようである。

「総合人間科は4年目だったけど、今年が1番たいへんだった。今まで、先生や友だちが訪問先に連絡してくれたけれど、今年は自分で交渉しないといけなかったからだ」

「友人が交渉した保育園の園長先生なんて『名大附属なんて学校はない!』とたいへん怒られたと言って、友人もとても怒っていました。」(M. Kさん) などということもあったようです。

教員にとっては、このフィールドワーク先探しをいかに手助けするかが山場となる。2時間の授業の間、休む間もなく自分の指導生20人と話し続けるという重労働であった。名古屋大学の職員録、タウンページ、スクールボランティア名簿(名古屋大学、保護者に呼びかけて手伝っていただける方に登録してもらっている)、昨年度のフィールドワーク一覧表などを一緒に見ながら探すのである。

「初めは、自分で何が調べたいのかもわからず、どこからどうやってテーマを追求していいか思いつかず、このテーマ(反抗と非行)を何で選んでしまったのかと後悔してしまったりもありました。でも、そこで、滝口先生がフィールドワークで“警察署”にいったらどうかというアドバイスをもらい、初め聞いたときは、『警察署なんてなんかこわいし行

きたくない』と思ったけど、でも、警察署に行ったことにより、すごくいいフィールドワークになりました。このことだけでなく、総合人間科でテーマを追求していくなかで、**自分では思いつかなかったことを、いろんな人にいろいろおそわったような気がします。**」(T. Dさん)

この生徒のように、日頃の学習より、教員のアドバイスを“助かる”と感じる生徒が多い。自分が決めなければ進まない状況の中で困ったときに手助けすることは、生徒とのつながりを深めることになる。

総合人間科も4年目ともなると、フィールドワークに卒業生が協力してくれるようになった。

「愛知県立芸術大学では名大附属の卒業生のI先輩が案内してくれたりして、手助けしてもらいとてもありがたく思いました。」(K. Mくん)「フィールドワークでお世話になったK先輩と中村先生にはとても感謝しています。たくさんのお話をしてくれて、私にはそれが全部必要なことでした。ボランティアをやっているK先輩の話には、盲導犬を思いやるやさしい心があり、尊敬しました。」(M. Oさん)

③フィールドワーク事前学習

今年度は教育学部の的場正美先生に研究協力を依頼したところ快く引き受けていただいた。ご自身もフィールドワークに出かけている経験をもとに生徒にインタビューのしかたについて、アドバイスをいただいた。フィールドワークの持ち物、記録の取り方など具体的で、自分の取材ノートを見せながら、熱心に話していただいたため、生徒もよく聞いていた。

感想には、「とても具体的な例をおっしゃったので、とてもわかりやすかった。プロだと思った。」「お話を聞いて、フィールドワークへの不安が少しやわらいた。(先方の名前などの)漢字の確認はしっかりした方がよい、ということは、全く知らなかったので、とても勉強になった。自分の持っていかなければならない物も、はっきりわかったのでよかった。」「今まで、取材ノートとか作ったことがなかったけど、話を聞いたら便利そうなので、やってみたいと思った。」などが見られた。

④フィールドワーク訪問場所

フィールドワーク先は、今までと同様に、名古屋大学教育学部、農学部、附属病院、理学部、工学部、医学部、保体センター、大気水圏研究所などに協力

していただいた。他にも、国際センター、中部盲導犬協会、保育園、保健所、長寿研究所、東海テレビ、サーフィンショップ、たばこ店や保護者の方など幅広く協力していただいた。

⑤フィールドワークによる生徒の変容

「初めは、すごくめんどくさいと思ったけど、電話をして受け入れてくれないところもあるのに、受け入れてくれるんだったら、少しは真剣にやってみようかなと思った。実際、フィールドワークはすごく楽しかった。(中略)総合人間科は楽しいものかも知れないと思った。社会のルールみたいなものも少しわかった気がする。敬語を使ったり、あいさつや、お礼をしっかりすることもできるようになったと思う。」(Hさん)

この例のように、個人テーマを追求する方法を漠然と考えているだけで追求活動が滞っていた生徒たちにとって、自分の責任で学校外の方と約束をすることはよい転機となった。

また、自分なりに追求活動を行い、知識を得て、フィールドワークにわざわざ行かなくともよいのにと消極的であった生徒にとっても次の感想に見られるように、自分の知識を客観的に見るよい機会となった。

「最初はこんなことをして意味があるのだろうかとか、全くヤル気なして流されるままで活動していた。だけど、フィールドワークをしてみても自分の考えが少し変わった。フィールドワークでは、行く前に、だいたいこんな答えが返ってくるだろうと自分で想像してあまり乗り気ではなかったが、実際フィールドワークをしてみたら驚きや感心の連続であった。それは、自分が思っていたことをくつがえすような答ばかりだったからだ。(中略)フィールドワークをしたことは自分にとって意味があったと思う。」(M. Tくん)

「私はアレルギーについて調べ始めたのは、私自身がアレルギー体質だったということ、今、アレルギーになる人が増えていっていることに疑問をもったからです。最初はアレルギーに関する知識はそれなりにもっているから大丈夫だろうと思っていた。(中略)フィールドワーク当日、自分もっていた知識はごく一部なんだと気づかされた。アレルギーは、とても幅広いものだった。」(H. Kさん)

生徒の追求するテーマは個人テーマであるが、122

人の中には、同じテーマを選ぶ生徒もいる。その場合は、複数でフィールドワークへ行く者もいた。

次の感想に表れているように、一人で訪問した生徒は緊張した分印象も強く、充実感や達成感を味わうことができた。しかし、次のT. Tくんのグループは、心理関係のテーマでフィールドワーク先が見つからない生徒を教育学部心理学科にまとめてお願いしたため、充実させることができなかった。

「今までのフィールドワークは学校のグループでいっていたので個人的なテーマの質問はできなかったけど、今回は一人でいったので聞いたことが全部聞けたからよかった。だけど、今までと違って電話や質問状を自分で全部やらないといけなくてとても大変だった。当日も一人なのでとても緊張した。でも結果的には、とても充実したフィールドワークになったと思う。」(A. Mさん)

「一番たまらなくいらついたのはフィールドワークだった。最初は3人で行く予定が、1人増え、2人増えで最後には10人ぐらいで行くことになってしまった。それは別にいいのだが、その10人の中の数人の聞く態度にとってもいらついた。なぜなら、話をしていないのだが、紙に文字を書いて文通してるし、自分のテーマのことが終わってしうと寝始める、あげくのはてはけいたいが振るえ出すはで、とても人の話を聞きに行った態度ではなく、とてもいやだったし、話をしてくれた人たちもとてもいやだったろうと思った。」(T. Tくん)

このグループに入っていない生徒からも次のような意見が出た。

「フィールドワークはすべて、1人で行かせるべきだと思う。2人以上、特に6人程の人数でフィールドワークに出かけるなど、まさに生徒の怠惰をあらわしている。」(A. Oくん)

“1グループ3人以内”といった指針を初めにしておくこととこのようなことが防ぐことができたであろう。

「礼状を書くのに困りましたが、前と同様に将来役立つと思って真面目にやりました。一つのことを自分で調べて訪問するということはとても大変だと感じさせられました。でも、そんなことを毎日やっている大人は、1回だけしかやっていない私なんかとは比べものにならないくらい大変でえらいと思いました。」(S. Sさん)

この文に見られるように、“大人”は、自分の責任で生活をしていて、自分より経験が多いというように“大人”に対する考え方を変えた生徒もいた。このような生徒は、昨年度もいた。

フィールドワークのよいところは、何といても、直接話が聞けることである。

「フィールドワークで実際に視聴覚障害の人とお話をしてみて感じたのは、“ちょっと目が見えないだけで普通の人と一緒だよ”ということでした。お話をしてくださった松崎さんは、私たちが『困ったことと一番嬉しかったことは何ですか』とお聞きした時、『人それぞれ違うと思うけど、私は、…』と話を始めました。私はこの時、“**視聴覚障害者**”と一まとめにしないで欲しいと思っているのがよくわかりました。」(K. Oさん)

この例でも、本などで文になっていたなら、大切な“視聴覚障害者”と一まとめにしないで欲しいという話し手の気持ちを十分くみ取ることはできなかったのではないと思われる。

また、後で引用するS君のように、「論文ができれば見せて欲しい」という先方の言葉が励みになった生徒も何人かいた。ともすると40人授業では忘れがちな、“自分のために、人が説明してくれること”の重みを感じたことであろう。

また、本来のテーマ追求の内容と直接関係なくとも、フィールドワークがよい経験となった生徒は多かった。

「フィールドワークのときに、道がわからなくて、地図で教えてもらった時、自分で声をかければ誰も迷惑そうな顔をしないで、**道を教えてくれたことが、すごくうれしかった。**」(U. Tくん)

「たかが高校生2人の訪問のために手書きで資料を作り、すごい量の資料を用意してくれた、その誠実さや、“**当社の**”と繰り返ししゃべっていて、会社へのおもい入れ、プライドを感じさせてくれた。正直、僕のテーマうんぬんよりも、**そこまで仕事を愛する人とめぐりあえたことの方がタメになった。**」(S. Iくん)

「フィールドワークの時、午前に尋ねた方も午後尋ねた方も、**すごくわかりやすく話してくださってこういうふうにしたら相手にわかりやすく伝わるんだ**と思いました。」(K. Sさん)

「フィールドワークというのは、普段僕たちにあまりカンケーしない人たちと接し、**世間の最低マナーを養う**ことが定義だと思う。言葉使い、地理、交通手段、相手の気持ちを考える、そのすべてを養うことであった。そして個人論文も文句を言いつつやってみたが、少し、身についた気がする。それは、語学力である。」(K. Oくん)

(3) 個人論文作成

昨年度から始めた個人論文の作成を今年度も行った。昨年は個人論文と研究集録の両方では負担が大きいの声もあったため、研究集録の枚数や内容を減らしたが、表現が自由な個人論文は残したのである。

400字の原稿用紙15枚以上を目安としたが、枚数制限はないため、写真や絵、資料を貼るなど、色とりどりの個人論文が出来上がった。すべてをコンピュータで打ち込んだ生徒も数人いた。中には全ページカラーで、写真もカラーで取り込み、パンフレットのような仕上がりの生徒もいた。

「始まりは、物理の鈴木先生と名大祭へ一緒にいったことからだ。僕はこんなに自然と人間のかかわりがあるのかととてもおどろいた。書物からでは決して得られないたくさんのお話を教えてもらった。(名大祭で)講演会をしてくれた先生に、参考文献を教えてください、質問しに大学へ尋ねに行ったこともある。(中略)僕は自分が調べてきたことをどうこうと言える。その自信からか、フィールドワークの発表で1人で15分ぐらい独占してしまった。書きたいこと、言いたいことが取捨つかなくて、いらいらしていた。個人論文の作成で僕は燃えた。つまり、すべてを書いてやるという気持ちになり、家の中の資料をすべて整理した。**ひまな時間、休みの日など学校の勉強を捨てて、これに取り組んだ。その闘志は、大学の先生との約束もあったからだ。**講演会や先生方の話をすべて文字に直した。ノートに下書きして、何度も書き加えたり、直した。自分の筆は、すこぶる快調なときはすべてではなく、長考して、頭をつかったことが多かった。僕は**文章を書くことはとてもよいことだ**と思った。いいたいことを、順にまとめあげていく力がのびていると、それを書いている時に分かったからだ。個人論文を書いた意味はすごく価値があると思う。大学の先生方に論文を見てもらって、『講演したかいがあった。』と言われ、とてもうれしかった。」(T. Sくん)

S君は、名古屋大学のキャンパス内にあるという利点を生かして、気軽に名大祭の講演を聞きに行き、フィールドワーク以外にも質問に行き、フィールドワーク後も個人論文を見せに行っている。

この他にも、特にスクールボランティアに登録してくださっている名大の先生は、日時さえ合えば、快く引き受けてもらえた。

IV. 一年の取り組みを顧みて

(1) テーマについて

「生命と環境-122通りのアプローチ」というテーマはとても幅広く、自分の興味・関心のあることから出発しても、このテーマに結びついていく。次のO. Jさんは自分が好きな“本”について調べたが、テーマと関係ないととらえている。個人論文には、本ができるまでや本屋さんの仕事内容など漫画も使って書いてあるが、「生命と環境」と結びつけるには至っていない。

「テーマを限定されるのもどうかと思う。結局私はテーマとまったく違うものを題材に選んだわけだけど…。あのテーマとは、一体何？やっばりいらないんでしょ。好きなこと調べたいもん。」(O. Jさん)

個人論文作成の指導は主に仕上がっていない生徒が中心であったため、この生徒に対して学年テーマにつなげる指導が不十分となった。本と人間の生活との結びつきや本とその原料の木との関係などいくらでも観点は広がるのだが、教官1人に対して20人の生徒が多すぎるのが残念である。

次の附属中学から進学したT. Iさんもテーマについて不満をもっている。

「総合人間科はいい授業です。でも2つ不満があります。まず、1つは、テーマが決まっていることです。興味をもっていることや将来の夢に関するなどで何でもいいということにしてほしいです。そして、2つ目は、もし、テーマを決めるとするなら、**中学と高校のテーマをかえてください。**私は、中学と同じことをやっているような気がします。」(T. Iさん)

確かに、中学と高校で同じテーマが繰り返される。大きいテーマが同じであっても中学3年生は広島・大久野島であり、高校2年生は沖縄の旅行があるため、内容が自ずと異なる。中学1年生と高校3年生では、5年の間があり進路選択を目前にして、意識が大きく異なる。中学2年生と高校1年生の「生命と環境」はこの点では最も重なりやすい。しかし、このような意見を書いたのは1人だけであった。林間学校での研究企画とフィールドワークを自分で交渉して行うことを義務づけた点が、中学2年生との重なりを軽減したと考えられる。

次のA. Sさんのように、4回目ということを生かしている生徒も多い。

「今年で総合人間科をするのは4回目ですが、一

番充実したかなと思いました。やっとな自分の知りたいこと、一番興味のあることにめぐり会えたからだと思います。でも、もう少し、自分のテーマを決める機会が欲しかったかなと思います。もっといろいろなビデオを見たり、大学の先生などをよんで、講義をしてもらったりすると、いろいろな点から私たちに知識が入ってきて、いろいろな観点に目を向けられやすいと思うのです。そうすれば、テーマが決まりやすいかなと思いました。そういう機会が増えれば、総合人間科を続けるにしたがって、本当に自分の知りたいことが分かってくると思います。」(A. Sさん)

昨年度はテーマを決めるための企画が多く、逆に早くに個人テーマを決めた生徒からは、自分の個人テーマの追求活動がしたいという意見もあったのだが、今年度は減らしたために、期限の6月までに決めることができない生徒が少なからずいた。

テーマ決めの際が迫る中で、次の生徒のように、「マスコミで話題になっているから」という理由で選び、もともとの自分の疑問ではなかった生徒は、追求活動が難しかったようである。

「“キレル”ということについて調べてみて自分に何の意味があったかということだ。決して無意味だったわけではないが、はたしてこれが自分の本当に知りたかったことかと思うとそうではなかった気がする。最近よくマスコミなどで話題になり、資料も多そうだし、それにこのことについて調べている人もけっこういるだろうと思い調べてみようと思ったがそんな簡単なものではなかった。」(T. Mくん)

次の生徒はもともと総合人間科に対する意欲が低い生徒であるが、中学2年生の時より“身近な”テーマを選び、医師である父親の手助けを得て、締め切りに遅れながらも前回よりは意欲的に取り組むことができた。

「例えばテストのように問題を出されてそれを解くだけというのならとても簡単なのだけど総合人間科は自分でテーマを決めて、自分で調べて、自分でレポートを書かなければならない。だからいつもやりたくないんだけど、なんとかがんばった。僕は今まで、酸性雨とか地球環境に対することをやってきたけど、今回は“食中毒と細菌”というテーマで始めた。それはただ、地球環境があきたわけではなく、**もっと身近で起こっている事件について調べてみたかったからだ。**なので、やってみたら案の定、酸性雨よりはやる気がでた。」(K. Nくん)

個人テーマにすることにより、K. N君のように、保護者の手助けが得やすいテーマを選ぶことができた

り、次の生徒のように、“自分に自信をもつ”ことができた。

「今まで総合人間科をやって、めんどくさいと何回も思ったが、実際やってよかったと思う。一人一人ちがうテーマで調べてることが、とてもいいと思う。その人は自分のテーマのことは、だれよりも自分が1番知っていることだから、役立つと思う。」(K. Yくん)

次の2人の生徒は“自分の興味・関心があること”を確実に選んだことにより、追求活動の困難さを乗り越えることができた。

「冬休みの宿題はフィールドワーク部分だけという中途半端な課題をだされた。作文は嫌いだけど、中途半端が嫌いな私は全部やることにした。この考えが失敗だった。部活のなかった3日間パソコンの前に座りっぱなしだった。初めは嫌々だったけど、やり始めてくとおもしろくて筆が進んでいった。きっと自分が好きなテーマだったからおもしろいと感じたのだと思う。テーマを決める時に、友だちと同じテーマを選んだ方が楽かもしれないと思ったけど、自分が好きなこと、興味のあることにしてよかった。(中略) それと論文はいいけど、作文はもうかんべん。」(U. Aさん)

「正直言って、やめようかと思ったときもあった。初めの頃、遺伝に関する本を開くだけで、嫌になることもあった。それでも続けていたのは、せっかく、子どもの頃の疑問が解けるというチャンスを、自らの手で逃がしてしまってもいいのかという思いが自分の中にかすかでもあったからだと思う。」(K. Tさん)

(2) 生徒の負担について

「総合人間科は目標が高すぎて、僕にとってはかなり負担がかかっていたような気がする。」(T. N君)

彼は学校生活で使うエネルギーの大半を野球部に注いでいる。それでも、「スポーツとけが」というテーマにしたことによって何とか個人論文を仕上げることができた。自宅には一度も持ち帰っていない。学校で配るプリント、テストなどすべて机の中やロッカーに一学期分ためて学校で捨てていく生徒である。

調べることによって自分の持病を大事にしなければならぬことがわかってよかったとは書いているが、研究集録を書くために、個人論文をいったん返したら捨ててしまった。最低限のエネルギーで最低限の単位を取ろうとしている彼にとっては、実質的に授業時間しか使っていないのだが、“負担”なので

ある。

彼は、総合人間科を単にめんどくさいと片付けることなく、“目標が高すぎる”と表現している。前述のK. Nくんのように、「テストのように問題を出されてそれを解くだけというのならとても簡単なんだけど総合人間科は自分でテーマを決めて、自分で調べて、自分でレポートを書かなければならない。」からではなく、“テストのように問題を出されてそれを解くだけ”でも精一杯という意識があるのであろう。総合人間科を通して、学ぶ喜びを感じ、改めて学ぶ意味を考える機会とし、学習意欲の低下している既成の教科の意欲も活性化して欲しいと願っているのだが、彼の場合はつながらなかった。例え、自分の趣味に関することでも、“知識を吸収したい”という気持ちがある生徒はこの科目を生かせるのであるが、この生徒のように、“知識より部活動の練習”という生徒がこの科目を生かすのはなかなか困難である。

次の生徒は、非常に真面目に追求活動に取り組んだのであるが、1つ1つの作業に時間がかかった。例えば、訪問依頼状と質問状を書くのに、下書きをじっくり書き、清書で失敗して書き直すなどしているうちに、学年で最終となってしまった。そして、遅くなりついでに手伝いを頼むと、気よく切手貼りなどをしてくれた。それだけに、総合人間科に要した時間は長かった。

「まず間違いなく他の高校の生徒よりも負担が増えたはずである。期限とか決められたあかつきには、そのものすごい圧迫感でストレスすら感じたほどである。そのわりに、期限を守っていないとつっこむ人も当然いるはずだが、それは、そのストレスの影響で筆ものびのびと進まなかったのだ。」(T. Mくん)

しかし、真面目にゆっくり進み、期限に遅れる彼に対して、「締め切り日は延ばさず、出さない人にはもっと厳しく指導するべきだと思った。」(Hさん)というまわりの視線が追い打ちをかけているのである。個人の追求活動の内容のレベルは個人個人でよいのだが、締め切りがなければ、なかなか進まない。

締め切りの設定、最低限求める活動内容などと授業時間とのバランスを考えて、今年度は内容を減らしたのであるが、まだ、次のように内容の割に授業時間が少ないという意見は多かった。

「3学期は、論文の締め切り、集録の締め切りでバタバタして、ほぼ徹夜状態の日も何日かありました。時間を上手に使えない自分も悪いんだろうけど、もっと学校でやる時間があれば、もう少し、楽にやれたらろうし、もっと追求できたかも知れない。」

(Tさん)

次の生徒は、総合人間科を批判しながら、「フィールドワークはすべて、1人で行かせるべきだと思う。」とさらに労力のいる方法を提案している。

「週1時間の総合人間科は通常の授業を多少なりとも圧迫している。このような総合学習に対する批判は、中日新聞の“教育・私の疑問”に書いてあったような気がする。総合人間科の目的は何であるのか理解しがたい。フィールドワークはすべて、1人で行かせるべきだと思う。2人以上、特に6人程の人数でフィールドワークに出かけるなど、まさに生徒の怠惰をあらわしている。」(A. Oくん)

4年目ということで、書くことに飽きてくる生徒もいれば、書くことに慣れて、あまり苦でなくなる生徒もいる。

「4年目ともなると、めんどくさい！フィールドワークは楽しい！うん。これは本心で楽しい。その後の集録がめんどくさい。本当にめんどくさい。期限があって先生からは『出せ！だせ！』と追い回され、あげくのはてには“居残り！”あ～最悪。」(A. Oさん)

「テーマを決めることからフィールドワークの準備のころからフィールドワーク後の論文や集録原稿などたくさん書いて提出することがあって、中学の時からそうだったけど、よりそういうことになれた気がします。」(Sさん)

内容を減らしても、必ず負担に思う生徒はいるであろうが、現状は総合人間科の授業は2週間に1度(2時間)、一度テストなどでなくなれば、月に1度しかなくなる。2時間続きはよいのだが、2週間あるいは1ヶ月の間に思考が途切れてしまうこともあり、今年度の内容であってもまだ、時間数の割に内容が多いと感じた生徒が多かったと思われる。

(3) 附属中学以外の中学からの生徒について

「この学校に入学した動機として、“総合人間科”に興味をもったことがあげられます。しかし、実際に総合人間科が始まってみて、私が想像していたものとは違うことがわかり、がっかりしました。私が想像していたのは、この学校でいうフィールドワークみたいなものを毎回やって、学校の授業とは関係のないこと(例えば職業体験)をやって、自分のやりたいこと探してみたいものをするものだと思います。(中略)総合人間科にも体験系を入れれば、もっと総合人間科が好きになれるのではないかと思います。」(T. Nさん)

「僕はこの高校に入って、初めて総合人間科とい

う教科を知った。最初は何を目的にして授業を進めていくのか全くわからなかった。だけどフィールドワークで自分でテーマを決めることになってみて目的は自分で決めるものなんだと分かった。」(K. Wくん)

「僕にとって、総合人間科というものは、初めてだった。(中略)最初、総合人間科は僕にとって単なる授業で、論文を書くということも、宿題と同じ、提出すればよいものでしかなかった。しかし、自分で決めたことを調べていくにつれ、それは変わっていった。自分で調べて、自分のものにしていく。最後に提出する論文というものにあるのではなく、その過程にあるのだと思った。」(U. Oくん)

このように、附属中学以外の中学からの生徒のとらえ方にもいろいろある。昨年度、これらの生徒に対するガイダンスが不十分で、何をするのかつかめないままフィールドワークを迎えた生徒たちが、全体の雰囲気にも影響を与えたため、丁寧に説明するよう心がけた。今年度はこれらの生徒の追求活動が遅れることはなく、むしろ積極的であった。担任が3人とも新しく、附属中学以外の中学からの生徒が疎外感を感じることがなかったことも一因かもしれない。また、4年目ということで、Nさんや後述のHさんのように“総合人間科”があるから附属を選んだ生徒が増えたためかも知れない。

(4) 総合人間科による生徒の考え方の変化

「遺伝子って好きな分野だから調べててとっても楽しかった。けど楽しかったので後悔が一つ。高2の選択で物理をとっちゃった。生物の授業も重なって調べてくるとすごいいおもしろそうだったのに…。生物とればよかったーとすごく後悔した。」(M. Sさん)

このように、総合人間科の活動が選択科目に影響を及ぼしたり(結果的には変更できなかったが)、次のように、身近な生活の場をあらためて観察する目を育てることができた生徒もいる。

「今回、自分のテーマについて調べてきて気づいたのは“観察する”ということでした。身近な生活の場をじっくり見てみることで、今までとは違った見方ができたと思います。」(Y. Kさん)

次のA.Yさんは、一学期の終わり頃、登校することが困難であった生徒である。

「他校の友だちにこの科目のことを話したら、とても興味をしてくれました。その人は『自分の学校もそういうことをして欲しい』と言っていた。『なんで?』と聞いてみたら、『だって楽しそうじゃん』と

即答で返ってきた。私の中で“楽しむ”というものがいつの間にか消えてしまったことに気づいた。一学期、入学したての頃、この科目の話聞いて、“楽しそうだな”と素直に思った。意味がわからなくとも何か、自分で好きなことを調べられるというのがすごく新鮮なものに感じていた。(中略)フィールドワークのことを進めていくうちに、少しずつ自分に自信がついてきた。当日もだいたいうまくいった。それと共に、自分の中でまた、“楽しむ”というものが、現れることができた。レポートをまとめるときは本当に楽しかった。自分で調べていくことはすごくいいものだった。今、こうして最後の授業をうけているけれど、この科目は、私にとって、新しいものを見させてくれた。力を与えてくれたといった方がいいかもしれない。」(A. Yさん)

総合人間科は、同じテーマを追求している生徒と友だちになったり、担任とのコミュニケーションの場ともなった。

「私はテーマを追求する過程で、自分の本当に身近なものへの認識の低さを痛感し、そしてそれをプロとしている人たちの認識・意識・プライドに感動し、自分の大切にしなければいけないものを新たに考えるきっかけとなりました。」(H. Kさん)

「自分で調査することの大変さを知って…実に疲れた。他人の力がいかに大きいのか、自分がいかに非力かを特に思いしたが、この総合人間科は、ある意味、実に楽しい。自立心ももて、そして、何かしようという意志がハッキリする。ただ、締め切りがなければもっといい。」(T. Iくん)

「他の高校では、私たちが総合人間科をやっている時、勉強しているの、月4回ぐらい授業を損しているように思えた。けど今は、総合人間科をやって、自分たちがどのような環境の中で育っているのかわかることができうれしく思っている。」(F. Yくん)

「フィールドワーク、個人論文という総合人間科を通して、社会的な接し方と自分の考えをまとめるという力がついたと思う。これらの経験は大人になって社会に出たときに大いに役に立つと思うし、もし、この経験を通して得られることができた力をもたずに社会に出たら、困ることがたくさん出てきってしまうと思う。」(H. Yくん)

これらの生徒はそれぞれの表現で、総合人間科の特徴を表している。日頃、学校内での活動が中心の生徒にとっても、また、教師にとってもフィールドワークは社会との接点となる。

次の生徒は、理数系の得意な生徒である。

「でもよく考えると不思議だ。調べるとはこういうことなのだろう。すでにわかっていることを自分の知識にするということなのだろうか。別に調べるといったって自分が新しいことを発見するわけではない。先人たちが発見したことを知るということだけのことである。つまり、資料の検索という作業であると僕は考える。なぜそんなことをするのだろうか。今まで生きてきて僕は何かしら興味のあることを知ってきた。それは僕の頭の中で整理されて。もし、僕が死んでも新しいことは何一つない。調べることが何になるのだろうか。何かを知っていても結局は自己満足の世界なのかも知れない。」(N. Oくん)

このように、“知る”ということに何の意味があるのかと考えたこと自体には意味がある。しかし、そのとらえ方は、知識と自分しかなく、知識をもった自分がどのように社会と関わるか、あるいは社会の中での自分という観点が欠けている。3学期は入試などもあって授業の回数が少なかったので実現しなかったのだが、最後に話し合いができる機会があると、個人論文を書いて終わりではなく、これが出発であるという認識が育ったかも知れない。

生徒の書いたたくさんの方の文を読み返すと、優れた内容や表現がたくさんあり、引用が多くなってしまった。これだけ、自分なりの表現で自分の考えを表現できるようになったのは、大きな成長である。教員にとっても、改めて、既成の教科では接することができない生徒の一面に触れたり、自分自身も学ぶ場となった。次の生徒も、理数系の科目では少々苦勞しているが、ここで学んでことをエネルギーとして、乗り越えていってくれることを願っている。

「総合人間科はとても大切な授業だと思った。今年一年で他のどの教科よりも身についたような気がする。それは、論文作成という最終目的に向けて、自ら進んでそれぞれのテーマに取り組んできたからだと思う。本当の意味での“勉強”とは実際に自分自身の目で確かめ、手で触れ、考えを広めていくことだと思う。だから、フィールドワークも重要な行事だと思うし、私自身充実した1日を過ごすことができた。論文作成は正直言って、面倒だと思ひ、“誰のために書いているのだろう。”とも思っていた。しかし、作成し終わった時、本当は“誰のため”でもなく“自分のため”だということに気がついた。今回の研究を通して身についた知識や考えはたぶん一生忘れることはないと思う。また、人の研究内容を聞いて、新しい知識が増え、今まで特に興味のなか

った世界にも目を向けることが多くなった。この授業を通して、人の親切にも触れることができた。フィールドワーク先の方々は、私のはっきりしない質問にも一生懸命耳を傾け、ていねいに答えてくださり、感動した。アポを取るにも苦労したが、人との接し方を学ぶことができた。私は総合人間科があることでこの学校を選んだが、その選択は間違っていなかったと思っている。」(K. Hさん)

「生命と環境」というと、「命を大切に」「環境を大事に」とすぐ結論づけてしまったり、環境の悪化を知って、将来に対して希望がもてず、逆に「今は楽しければよい」と考えたりすることも多い。しかし、この問題は結論が出るものではない。次のK. Mさんが表現しているように、「生命と環境」というテーマが“重荷”から、“自分の生き方を考えさせられるもの”になった」というスタンスで考え続けていって欲しいと思う。

「初めての総合人間科という科目とその内容を知った時、私はとても不安になった。なぜなら自分でテーマを決め、こんなに長い時間をかけて追求し、その内容を1冊の本にできるぐらいの枚数にまとめる、という事をするのが初めてだったからだ。それに、“生命と環境”という大きなテーマも、私には難しく感じられた。自分の興味のあることと、生命と環境をどう結びつけるか、といろいろ悩んだ。(中略)私にとってこのフィールドワークはとても大きな自信につながった。音楽療法について、ほとんど知識のなかった私が本を読み、そこから自分で疑問に思った事をあんなに専門的なことまで聞くことができるなんて思ってもいなかった。(中略)名大附の総合人間科で、自分で追求することの大変さ、そして喜びを知ることができた。普段、あまり考えることがなかった“生命と環境”というテーマが“重荷”から、“自分の生き方を考えさせられるもの”になった。」(K. Mさん)

彼女が表現しているように、総合人間科が“自分で追求することの大変さ、そして喜びを知る”きっかけとなり、「生命と環境」という避けては通れない大きな問題を考えることが、自分の生き方を考える基盤となっていってくれることを願っている。